

専門論文

『都林泉名勝図会』で楽しむ京都庭園観光の提案

Proposal for garden tourism visiting historical gardens in Kyoto with *Miyako rinsen meisho zue*

小野 健吉

Kenkichi Ono

大阪観光大学観光学部教授

キーワード：ガーデンツーリズム、歴史的庭園、日本庭園、京都、『都林泉名勝図会』

Key Words : garden tourism, historical garden, Japanese garden, Kyoto, *Miyako rinsen meisho zue* (Pictorial guide to gardens and scenic spots in Kyoto)

Abstract :

Garden tourism visiting historical gardens is an important part of Kyoto tourism. It is no exaggeration to say that the main purpose of sightseeing at such temples as Kinkaku-ji, Ginkaku-ji and Ryoan-ji, which are visited by many tourists, is to appreciate the gardens. When appreciating Kyoto's historical gardens, not only enjoying the appearance that you see but also learning about their historical changes enhances the enjoyment appreciating them. *Miyako rinsen meisho zue* (Pictorial guide to gardens and scenic spots in Kyoto), a garden guidebook published in Kyoto in 1799, provides bird's-eye views of the famous gardens of the time. This paper proposes a way to enjoy comparing the bird's-eye view of the garden with its current state when visiting gardens whose bird's-eye views are included in the volume and which still exist today.

I. はじめに

歴史的庭園を巡る庭園観光は、京都の観光の重要な部分を占めている。例えば、多くの観光者が訪れる金閣寺や銀閣寺あるいは龍安寺などは、庭園の鑑賞が主な観光目的であることは誰もが認めるところであろう。上記寺院などを構成資産とする世界遺産「古都京都の文化財」においても、構成資産の中で庭園の持つ意味が、海外の庭園への影響も含めて高く評価されている¹。

筆者は、京都の庭園観光に関するオンライン調査を2021年7月に業者委託により実施した。調査対象者は、京都観光旅行時18歳以上、狭義の首都圏（東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県）在住で、調査委託会社アンケートモニター登録者からスクリーニング調査で絞り込んだ500名（男性295名、女性205名）。設問は、職業のほか、京都観光旅行全般・京都の庭園観光・寺院等の拝観料（入場料）に関するもの計20項目、くわえて京都の庭園観光に関する自由意見も求め、その結果に基づいて今後の京都の庭園観光に対する提案を行った（小野2022、pp.51-68）。京都の庭園観光の人気の高いことを踏まえたうえで行った提案は以下のとおりである。

1) 建物と庭園の関係や一体性が理解しやすい平面図・鳥

瞰図等の提供

- 2) オーバーキャパシティを抑制するための予約制やダイナミックプライシングの導入
- 3) 複数の庭園入場をセットにし、トータルの入場料金の低減を図る共通入場券等の導入
- 4) 外観的な美しさや快適さだけでなく、歴史的文化遺産としての庭園の魅力に関する情報発信

本稿では、4)に関連する具体的な提案として、江戸時代後期に刊行された京都の庭園・景勝地ガイドブックである『都林泉名勝図会』の鳥瞰図と対照しながら鑑賞する庭園観光を取り上げたい。『都林泉名勝図会』の特色は、精緻に描かれた庭園の鳥瞰図である。鳥瞰図という誰もが理解しやすい資料を携えての歴史的庭園観光の提案は上記1)にも関連するものであり、日本人観光者はもちろんのこと、京都の庭園を訪れる外国人観光者を惹きつける可能性を持ちうると考える。

II. 『都林泉名勝図会』

1. 『都林泉名勝図会』とその役割

(1) 『都林泉名勝図会』と先行研究

『都林泉名勝図会』は、江戸時代後期の1799年に刊行

された京都の庭園・景勝地のガイドブックである。著者は、俳諧師の秋里籬島。各庭園・景勝地について、説明文とともに鳥瞰図が付いているのが特徴で、精緻なその鳥瞰図は3人の画工（西村中和・佐久間草偃・奥文鳴）によって描かれたものである。出版の意図や当時の描法から考えて、鳥瞰図が庭園を寸分違わず描いたものでないことは言うまでもないが、画工が現地に向いていることは確かであり、相当の写実性を持っていることは確かである。

『都林泉名勝図会』は庭園史研究者には広く知られた書物であり、鳥瞰図によって当時の庭園の姿を具体的に知ることができるため、これまでも多くの著書・論文で取り上げられてきた。白幡洋三郎は、本書全体を掲載した上で簡潔な解説を加えた『都林泉名勝図会（上）』（白幡1999）・『都林泉名勝図会（下）』（白幡2000）を著し、さらに一部の図版に彩色を施して興味深い解説を付けた『彩色みやこ名勝図会』（白幡2009）を著した。白幡のこれらの業績は、研究者だけでなく広く一般にこの『都林泉名勝図会』の存在を知らしめた点で特筆に値する。筆者も白幡に触発されて、『都林泉名勝図会』と『都名所図会』の庭園図に関する解釈を示したことがある（小野2017、小野2018）。最近の論考では、本書の庭園描写の特徴を詳細に追った白木朝乃の論考（白木2020）が興味深い。

(2) 庭園観光ガイドブックとしての『都林泉名勝図会』

秋里籬島は、1780年に同じく鳥瞰図付きの京都の名所ガイドブックである『都名所図会』を刊行し、成功を収めている。その後、同様の地域ガイドブックである『和泉名所図会』（1796）や『摂津名所図会』（1796-98）などを次々と刊行した。京都についても、『都名所図会』の続編の『拾遺都名所図会』を1787年に刊行し、さらに雪・月・花・丹楓・梅などの項目を立てて名所を紹介した『都花月名所』を1793年に刊行している。そして、1799年に刊行したのが『都林泉名勝図会』である。庭園・景勝地に特化したガイドブックの刊行は、この時代の京都観光において庭園を訪れることが人気であったことを示している。また、このガイドブックで紹介された庭園の大半が仏教寺院の庭園であったことも見逃せない。日本では、宗教施設である仏教寺院が歴史的に庭園文化の中心の一つとなるという、他の国には見られない状況があった（小野2019）。そして、この時代の日本の観光旅行では仏教寺院や神社を巡礼する宗教観光が主流であったことから、仏教寺院の多い京都は多くの巡礼観光者を集めた。そして、宗教的な参拝に付随する観光スポットとして仏教寺院の庭園は人気が高かったわけである。

(3) 庭園修復の参照資料としての『都林泉名勝図会』

『都林泉名勝図会』はガイドブックとして読まれる書籍であるだけでなく、後世、庭園の修復の際に参照されることもあった。久恒秀治は、1947年から49年にかけて京都府の委嘱を受け、当時荒れていた京都の庭園の修復に携わった（久恒1967・

1968・1969）。久恒が手がけたのは、西芳寺庭園を手始めに天龍寺庭園・鹿苑寺庭園・慈照寺庭園・等持院庭園・成就院庭園・智積院庭園・南禅寺方丈庭園・南禅院庭園・高台寺庭園・本願寺大書院庭園といった名だたる歴史的庭園であった。そして、修復にあたっての重要な参照資料としたのが『都林泉名勝図会』の鳥瞰図だったのである²。京都府文化財保護課の技師として京都の文化財庭園の修復・修理に携わった中根金作もまた、『都林泉名勝図会』の絵図を当時の庭園を正確に描いた資料と高く評価し、修理・修復の際の参照資料としている³。

こうした修復は、庭園の外観を描かれた状態に近いものとする結果をもたらした。しかし、現在の庭園修復では標準となっている考古学的発掘調査を実施せず、あるいは実施しても十分でなかったことは、時代的にやむを得なかったとはいえ、庭園修復におけるオーセンティシティの観点での問題を残した。私たちが『都林泉名勝図会』の鳥瞰図と現地を比較しながら鑑賞する際には、こうした修復によって外観が復元された部分があることにも留意しておかなければならない。

2. 『都林泉名勝図会』鳥瞰図の描写

『都林泉名勝図会』の鳥瞰図の描写の特色については、白木（2020、pp.41-66）が絵師による描写の特徴を含めて詳細な分析を行っている。ここでは、その成果も参考にしながら、視点場・描写範囲のほか水・石・植物・地被ならびに人物の描写の観点から簡略に整理しておきたい。

(1) 視点場・描写範囲

鳥瞰図の視点場は、原則として描く対象庭園の上空である。絵師がこうした視点場を実際に体験することや視覚的情報として入手することは、当時はもちろん不可能であった。したがって、絵図は、地上での観察をもとに鳥瞰図として立ち上げたものである。1780年の『都名所図会』などの先行する名所図会でもこのような鳥瞰図が採用されており、こうした手法はこの時代に既に確立していたのであるが⁴、『都林泉名勝図会』の絵図は精細であり、画工の技量の高さが窺える。また、描く範囲は一律ではない。庭園図においても、建物や借景となる周辺景観も含めて庭園を描いているもの（「大徳寺方丈」「天龍寺方丈林泉」など）、建物と庭園を描いているもの（「西六條本願寺対面所林泉」など）、庭園だけを描いているもの（「妙心塔頭退蔵院」など）というふうの様々である。これは、立地やその庭園の特色によって鳥瞰図を描き分けていることを示している。

(2) 水・石・植栽・地表

庭園の中で、水は池・流れ・滝といった形を取る。その表現については、池では水面の揺らぎ、流れや滝では水流を巧みな線描で表現する（「天龍寺方丈林泉」など）とともに、池に氷が張った表現（「金閣寺」など）も見られる。

石については、相対的な位置や大きさは比較的正確に描き、

節理などによる表面的な線状の模様等も観察して描いている（「龍安寺方丈林泉」など）。一方で、チャートや結晶片岩や石灰岩といった石材の違いは意識されていないが、これは外観として明瞭でないことも多く、着色でないことを考え合わせると当然とも言える。

植栽については、マツは庭園内のもも敷地外のもも樹形から認識できるが⁵（「銀閣寺林泉」など）、広葉樹は判別が難しい。特殊なものとしては、ソテツは独特な樹形から明確に認識できる（「西六條本願寺対面所林泉」など）。球状や直方体状に描かれた低い刈込も、ツツジ・サツキが多いのであろうが、絵図の表現だけでは樹種の確定には至らない（「智積院」など）。

地表の表現のうち、地被については、芝は細い縦線で描かれる（「高台寺方丈林泉」など）一方で、コケについては、点描で表現されている「龍安寺方丈林泉」以外はコケの可能性の高い場所も、白地で表現されていることが多い（「南禅寺金地院」など）。また、枯山水の平坦部は白地で表現されており、白砂（白川砂）⁶が敷かれているのかどうかは絵図の表現からは不明である。ただし、庭園の平坦面に白砂を敷くのは、古くから用いられた手法であり⁷、白砂が敷かれていた事例が多いものと考えられる。

(3) 人物

『都林泉名勝図会』の「庭園図」では、庭園のサイズに比べて人物が明らかに小さく描かれている。金閣寺や銀閣寺のような規模の大きい庭園ではそれほど目立たないが、龍安寺・金地院・智積院のような比較的小規模の庭の中に描かれた人物は、庭園との相対的な大きさが一見して不自然である。こうした描き方を採った理由は不明であるが、庭園を現実とは隔絶した仮想の世界と捉える意識の表現ではないかと筆者は考えている（小野 2004、p.288）。

Ⅲ. 『都林泉名勝図会』鳥瞰図との比較で楽しむ京都の庭園

前章で述べたとおり、『都林泉名勝図会』は江戸時代後期の京都の庭園の実態を知る貴重な資料であるとともに、庭園の修復にあたっての参照資料としても利用されてきた。本稿は、京都の庭園観光の際に、庭園の現在の姿と200年余り前の姿を比較して楽しむ資料としての『都林泉名勝図会』の利用を提案するものである。いうまでもなく、長い年月の中ですでに消滅した庭園もあるし、存在していても原形をとどめないほど改変された庭園もある。本章では、『都林泉名勝図会』に描かれた姿が比較的良好に遺っており、なおかつ常時あるいは期間限定で一般公開がされている主な庭園を取り上げ、その庭園の概要を記したうえで『都林泉名勝図会』の鳥瞰図を示し、先行研究も参照しながら、現状と鳥瞰図との大まかな比較を行なっておきたい。

(1) 大徳寺方丈庭園（北区、国指定史跡・特別名勝）

大徳寺は、鎌倉時代末期の1326年に創建された禅宗寺院である。応仁の乱（1467～77）で焼亡したが、その後復興した。特に安土桃山時代～江戸時代初期（16世紀末期～17世紀初期）にかけては、有力武将により塔頭が境内に多く建てられた。本坊の方丈も1635年の建築で、この時代を代表する禅宗寺院建築である。庭園は、方丈の南面と東面に連続する枯山水である。西を廊、南を築地塀、東を生垣で囲われた南庭は、南東隅に2石を高く立て1石を添えた枯滝石組を置き、その背後の刈込で山を表現する。さらに枯滝石組の西や北にも平石を据えて陸地や島を表現しながら、全面の白砂敷で海を表す。一方、生垣を背にして南北に細長い東庭には、5群の石組（七五三の石組）を置く。

『都林泉名勝図会』「大徳寺方丈」の鳥瞰図は、方丈建物の北上空から南庭の東部と東庭および比叡山などの敷地外の景観を描く（図1）。画面中央の南庭では白砂敷に南東



図1 大徳寺方丈

隅の枯滝石組などが描かれ、東庭（画面左）では5群の石組（七五三の石組）が描かれている。また、東庭の東後方において画面内に収まらない比叡山が、画面に収めるため本来の位置より画面中央（南）よりに位置を移して描かれている。これは、この庭園における借景としての比叡山の重要性を強調するための操作と考えられる。

現状を絵図と比較すると、南庭の南東隅の枯滝石組は変化がないが、背後の刈込がかなり大きくなっているほか、白砂敷には絵図には描かれていない砂紋が描かれている。借景としてこの庭園の不可欠の要素であった比叡山は、周辺の都市化のなかで今は見えない。

(2) 本願寺大書院庭園（下京区、国指定史跡・特別名勝）

本願寺（西本願寺）が豊臣秀吉により現在地に寺地を与えられたのは1591年のことである。江戸時代初期の1632年に建てられた大書院の東に位置することから、庭園の築造もこの頃と考えられる。約700mの庭園は、白砂敷で海を表す枯池に護岸石組を施した亀島・鶴島を北から順に配する枯山水庭園である。大書院から見て左手奥にあたる北東部には結晶片岩（青石）などを用いた枯滝石組を据え、そこから溪流が流れ下る姿が石と白砂で表現されている。枯池北岸から亀島、亀島から鶴島へは大きな切石橋を架け、鶴島から枯池東岸へは自然石の石橋を架ける。植栽では、この庭園が築造された頃に京都の庭園で用いられるようになったソテツが特徴となっている。

『都林泉名勝図会』『西六條本願寺対面所林泉』の鳥瞰図は、大書院（対面所）の南上空に視点を置き北東方の庭園を描く（図2）。左奥に大きな立石を中心とした枯滝があり、その下の滝口には自然石の石橋が架かる。幅を広げた白砂敷の流れが画面左の亀島と右の鶴島などをめぐって海の景色を表現する。亀島沿いなど、ところどころに浅瀬あるいは浜を

示すと見られる玉石敷きも見える。植栽を見ると、東奥の出島や鶴島などのソテツのほかマツが目立ち、画面中央奥の庭園東部には球状や直方体状の灌木の刈込が見える。

現状を絵図と比較すると、全体的なレイアウトは概ね保たれているものの、絵図に見える滝口の石橋や玉石敷きの浅瀬などは姿を消している。さらに、亀島や鶴島の護岸石組の様子は絵図から変化している。植栽でも、ソテツが亀島にも植えられているほか、庭園の北部や東部などでは絵図とは異なって広葉樹が目立つ。

(3) 銀閣寺庭園（左京区、国指定特別史跡・特別名勝）

室町幕府八代将軍・足利義政が応仁の乱後の1482～90年に東山山麓に造営した別荘・東山殿を義政の没後に仏寺としたのが、銀閣寺と通称される慈照寺である。当初は、水に恵まれた山麓の地形を活かして滝や池を造るとともに、二層の楼閣である銀閣を庭景の一つの焦点とする山荘庭園であった。その後の戦国時代に荒廃したが、江戸時代初期（17世紀初期）に建物位置の変更も含めて大改修が行われ、現在見る姿の原形が形成された。さらに、江戸時代中期の18世紀半ば以降には、高さのある白砂敷の銀沙灘や白砂を円錐台に固めた向月台が付け加えられた。寺院庭園ではあるものの、本来が将軍家の別荘庭園であり、江戸時代には回遊式の庭園として多くの観光者を集めた。

『都林泉名勝図会』『銀閣寺林泉』の鳥瞰図は、本堂（方丈）と東求堂の北上空に視点を置き、南から東にかけての庭園の広い範囲を「其一」「其二」の連続する絵図でパノラマ的に描く⁸（図3）。「其一」の画面右手から中央（南方）にかけては銀閣とその前面の錦鏡池、その手前の方丈南面には銀沙灘と向月台および細長い長方形の花壇が描かれている。さらに、それらの背後には、東山殿の月見の宴で欠かせない存在であった月待山も見える。庭園東部を描く画面左の



図2 西六條本願寺対面所林泉

「其二」に視線を移すと、池に水を注ぐ滝（洗月泉）や兩岸に橋を備えた中島が描かれ、庭園の植栽ではマツが目立つ。

現状を絵図と比較すると、池の形状や護岸石組は絵図と大きくは変わらないように見える。とはいえ、白幡（2009、pp.6-7）が指摘するように、銀沙灘の砂紋や向月台の高さは変化しており、花壇も存続はしているものの、東西に長い形から南北に長い形に作り替えられている。洗月泉も、水量豊かに描かれた絵図に比べ水量を減じている。

（4）南禅寺方丈庭園（左京区、国指定名勝）

南禅寺は、鎌倉時代後期の1291年に、亀山上皇の天皇時代からの離宮を禅宗寺院としたもの。鎌倉時代末から室町時代前半（13世紀末～15世紀半ば）には最高の寺格を持つ禅宗寺院として栄えたが、応仁の乱で焼失・荒廃した。その後、江戸時代（17世紀初期～19世紀）になって、本坊

や多くの塔頭が復興された。本坊の方丈は、1611年に内裏女院御所を移築したもので、その南面にある庭園も概ねその時期に整備されたと考えられている。庭園は枯山水の平庭で、方丈から見て左手の奥から中央すなわち庭園東南部に石と植栽を集中的に配置、右手の南西隅にも刈込を置き、残りは白砂敷となっている。左手の最も奥の石が大きく、それを起点に右に向かって少しずつ大きさを減じる石を並べるリズムカルな配石が特徴である。

『都林泉名勝図会』「南禅寺方丈」の鳥瞰図は、方丈の上空に視点を置き、南面の枯山水庭園と借景となる背後の大日山を描く（図4）。庭園は、方丈から見て左手奥（東）に最も大きな石をどしりと据え、右（西）に向かって石を配置しながら、2本のマツと刈込で石の隙間を埋める姿である。石や刈込まわりを縁取るように描かれた破線は、コケと白砂敷き



図3 銀閣寺林泉

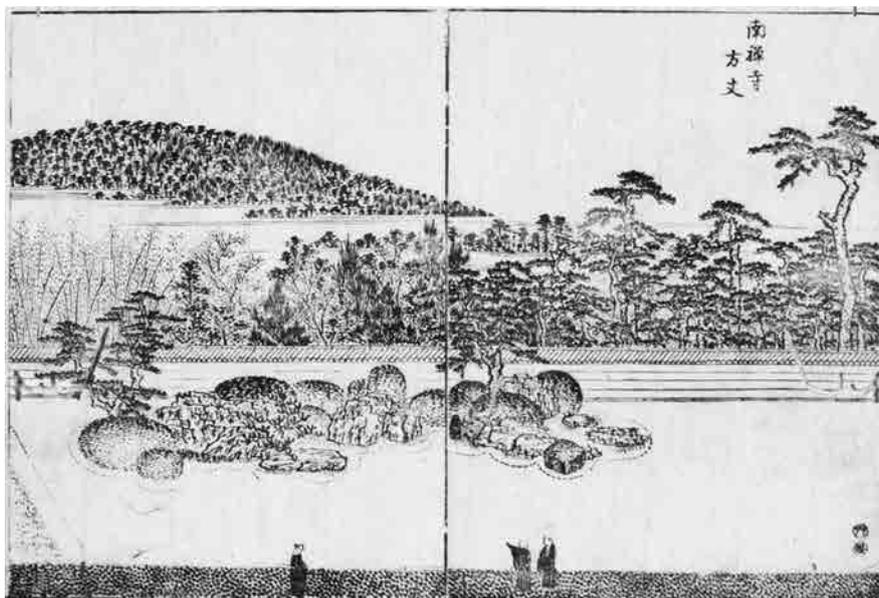


図4 南禅寺方丈

の境界を示すと見られる。

現状を絵図と比較すると、画面一番左の大石を起点に右に向かって少しずつ大きさを減じながら石を並べる配石の全体的な雰囲気は変わらないが、石の位置や高さなどにやや異なる点も見受けられる。また、現状では、絵図には描かれていない砂紋が白砂敷に描かれている。植栽が変化しているのは当然だが、絵図に描かれた右側のマツの位置には現在カエデが植わっており、庭園に彩を添えている。絵図では庭園の南を限る築地塀の背後は樹林、大日山と続くが、現状では築地塀の左（東）より部分の背後に玄関の大屋根が見えるため、庭園と大日山との連続性が途切れている。

(5) 南禅院庭園（左京区、国指定史跡・名勝）

南禅院は南禅寺の塔頭であるが、亀山天皇が造営した離宮の仏堂として1287年に創建されており、南禅寺創建の基盤となった寺院とも言える。東山から西に張り出す尾根の北斜面に平坦地を造成して寺の敷地としており、山裾に沿った池を中心とする庭園も、原形は創建時に遡ると見られる。ただし、現在の方丈は江戸時代中期の1703年の再建であり、その際に池の形状が改変されている可能性もある。西向きに建つ方丈の前面には平坦部を取り、その西の山裾に西池があり、この池は方丈側面に位置する南池につながる。禅宗寺院において、儀式空間でもある方丈前面に平坦部を隔てて池が配されるのは珍しいが、これは離宮であった頃の園池を引き継いだためと考えられる。西池には岩盤を掘り残した島があり、南池にも島がある。南池の南東部には滝があり、現状では山から水を導水し、この滝から池に水を注いでいる。

『都林泉名勝図会』「南禅院」の鳥瞰図は、方丈の上空に視点を置いて、画面右の西池と左の南池をパノラマ的に描き、西池背後の山にある亀山法皇陵も描く（図5）。パノラマ的な画法のため、方丈と西池・南池の位置関係や二つの池の

繋がりに歪みが生じている。また、方丈前面の平坦部は白砂敷と見られ、北門から方丈中央に至る通路が描かれている。

現状を絵図と比較すると、西池と南池ならびにそれぞれに配された島の配置は概ねその姿をとどめているが、方丈前面平坦地の地表面は現在はコケとなっている。また、南池では絵図に描かれた二つの島に渡る橋が失われているほか、西池と南池をつなぐ水路上の部分に架かる橋の形状も変化している。

(6) 金地院庭園（左京区、国指定特別名勝）

金地院は室町時代の中期（14世紀末～15世紀初め）に創建された禅宗寺院であるが、江戸時代初頭の1605年に以心崇伝が南禅寺境内の現在地に再興した。方丈前面（南面）の庭園は枯山水で、方丈近くは儀式にも対応できる白砂敷とし、その向こう側右手（西）に鶴首石や羽石を備えた鶴島、左手（東）に亀頭石や亀尾石を備えた亀島を向かい合わせで置き、両石組の間の空間の方丈側には長方形の大きな礼拝石、奥に神仙島の表現とされる石組や石燈籠を置く。これらの庭園主要部の背後の斜面は刈込となっている。また、鶴島の中央にはアカマツ、亀島の中央にはビャクシンが植わる。方丈から見て右手にあたる庭園の西端には長方形の池を配し、その西には開山堂が建つ。池には開山堂に向かう橋が架かり、方丈前面の西部からこの橋に向けて飛石が打たれる。

『都林泉名勝図会』「南禅金地院」の鳥瞰図は、方丈の上空に視点を置き、白砂敷と鶴島・亀島などからなる枯山水を中心として、右（西）は開山堂、左（東）は東門までを、「其一」「其貳」の絵図でパノラマ的に描く（図6）。鶴島の中央には直立するマツ、亀島の中央には幹の屈曲するビャクシンが見える。鶴島と亀島の間には礼拝石が置かれ、その背後には石組が配される。これらの枯山水主要部の背後は丸く刈り込まれた植栽となっている。鶴島・亀島や礼拝石の前面を縁

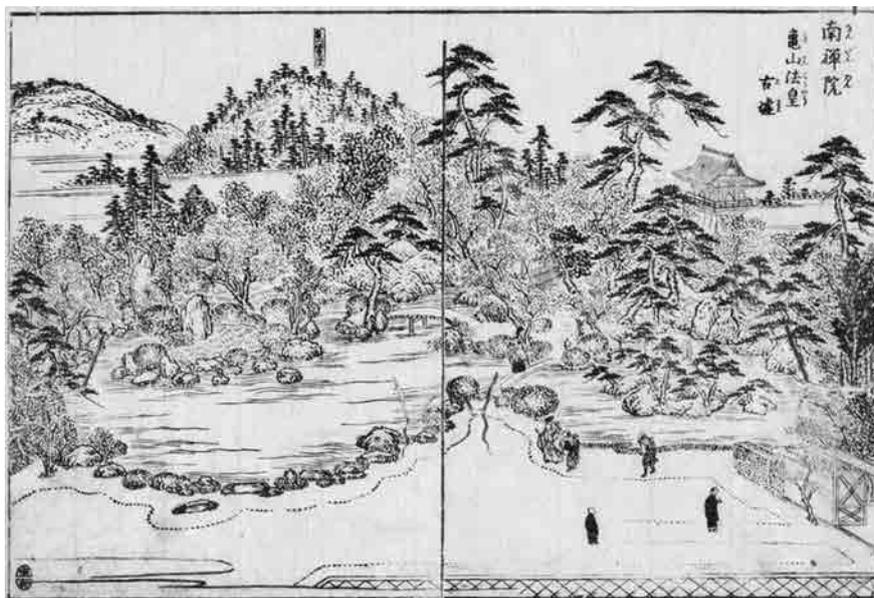


図5 南禅院

取る破線は、コケと白砂敷の境を示している。開山堂前の池は、奥（南）に石組で護岸した不整形な池が続き、池の中島を挟む二つの橋を渡り階段を上ったところには社（弁天社）が見える。また、画面右手前（北西部）には、方丈から開山堂前の池の橋に至り、さらに鶴島背後に回り込んで前述の橋に至る飛石が描かれている。

現状を絵図と比較すると、画面左手にあたる東部は、門が撤去されるなど大きく変化している。庭園の中心をなす方丈前面の枯山水の主要部は絵図の状況をよくとどめているが、石組背後の刈込が最近かなり失われて南西後方の東照宮が見通せる状態になっている。また、鶴島では何代目かのマツが最近枯れて小さな稚樹が新たに植えられている。また、開山堂前の池の南部の様子は大きく変化している。方丈から開山堂前の池の橋に至る飛石も絵図の様子とは異なる。白砂敷きに付けられた砂紋は、絵図には見られないものである。

(7) 知恩院方丈庭園（東山区、国指定名勝）

京都東山の華頂山中腹にある知恩院の壮大な伽藍は、江戸時代初期の17世紀前半に徳川将軍家の援助で整備され

た。方丈庭園は、1642年頃に庭園の原形が造られ、何度かの改修を経ながら18世紀末には現状のレイアウトになったと見られる。庭園は、小方丈の南、大方丈の東に位置する北池と大方丈の南に位置する南池が繋がる池庭で、滝石組・護岸石組・岩島⁹や池中の石燈籠などが見所となる。池庭から階段を登った所にある山亭から京都の町を一望する眺望も素晴らしい。

『都林泉名勝図会』『知恩教院方丈林泉』の鳥瞰図は、「其一」「其貳」の連続する絵図でパノラマ的に描かれている（図7）。「其一」は、大方丈の上空から南方の南池と山亭に登る階段などを描く。池には中島があり、そこには石橋が架かる。また、階段の登り口の北池南岸に近いところには大きな立石が据えられている。また、画面右端（西）には御影堂の大きな屋根も見える。大方丈の上空から東方の北池を描く「其貳」では、池の対岸の巨石を組んだ石組や鳥居のある社、池の小島に立つ石燈籠などが目に付く。

現状を絵図と比較すると、南池と北池が連続するレイアウトは現在も保持されている。池の護岸石組や南池の中島も概ね



図6 金地院

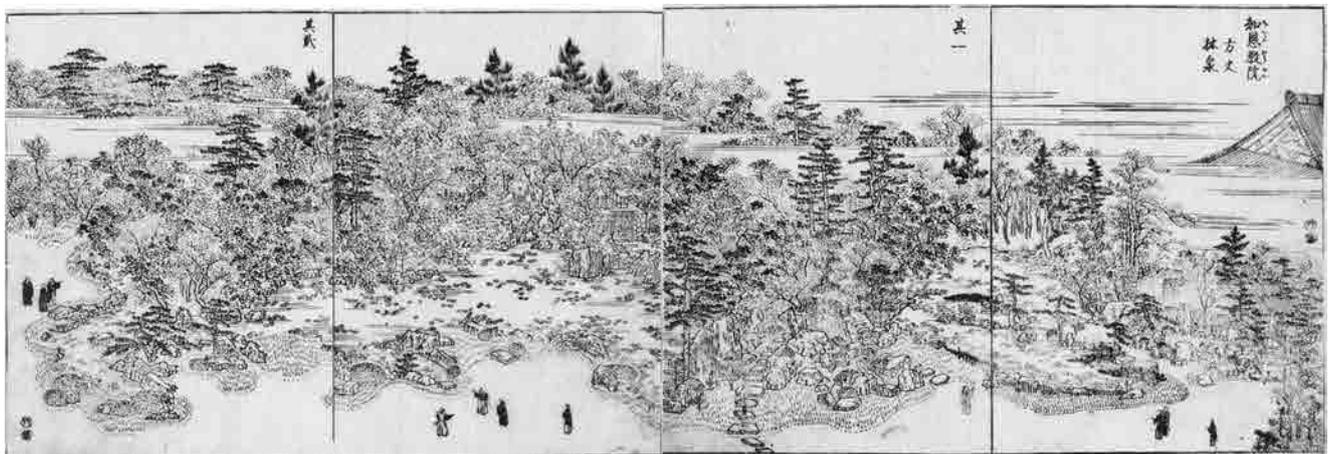


図7 知恩教院方丈林泉

絵図に近い姿であり、北池南岸の大立石（慈鎮石）や北池の石燈籠といった特徴的な要素は変化が見られないことから、全体的な雰囲気をよく留めていると言えよう。こうした状況は、中根による修復によるところが大きい（中根 1999、pp.191-193）。一方、植栽はかなり変化しており、山亭に登る階段も大きく改修されている。

(8) 高台寺庭園（東山区、国指定史跡・名勝）

高台寺は、江戸時代初頭の1606年に豊臣秀吉の未亡人であった北政所が、東山の山麓に創建した寺院。庭園の造営時期は不詳であるが、北政所の没後に段階的に整備されたものとみられる。その庭園は、南向きに建つ開山堂の西側面に偃月池、東側面に臥龍池を配置する池庭で、双方の池には東西方向の廊橋が架かる。方丈のある西側からの景色

が見所であるため、偃月池は出入りの多い複雑な形で、護岸には石組を巡らせ、池の北部には中島を置く。また、池南岸には低い築山を築き、立石を据える。背後の東山も借景となっている。一方、臥龍池には東の高台に建つ霊屋への通路である臥龍廊が架かる。

『都林泉名勝図会』『高台寺方丈林泉』の鳥瞰図は、偃月池の西上空（方丈の上空）に視点を置き、東方の開山堂と偃月池南部ならびに背後の東山を描く（図8-1）。絵図名では「方丈林泉」の語が用いられるが、描かれているのは、前述のとおり開山堂の西庭にあたる偃月池一帯である。また、「高台寺小方丈」の鳥瞰図は、偃月池の西上空ながら当時は小方丈のあった方丈のやや北上空に視点を置き、同じく東方の開山堂と偃月池北部ならびに背後の東山を描く（図8-2）。背

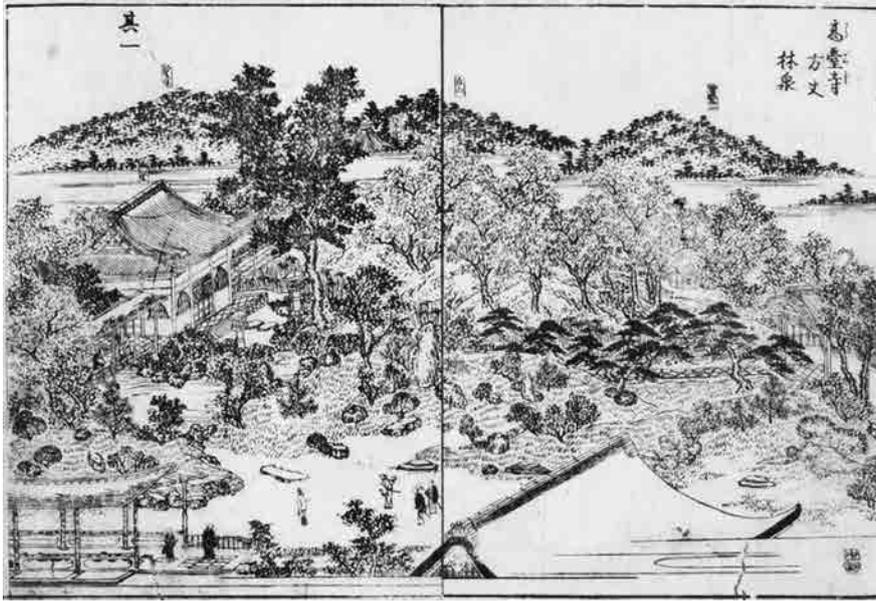


図8-1 高台寺方丈林泉



図8-2 高台寺小方丈

後の東山については、二つの絵図に、「音羽山」「雲鷲山」「白山峯」「花頂山」といった各峰の個別の名称が記されており、東山の借景を明確に意識していることがわかる。なお、二つの絵図は、視点の位置がずれるため連続しない。

現状を絵図と比較すると、「高台寺方丈林泉」に見える偃月池右手（南）の築山一帯は、現状ではやや姿を変えており、描かれた立石をはじめとする景石群は、雰囲気は遺るものの現状と同一でないように見える。一方、「高台寺小方丈」に描かれた偃月池北部とその護岸の石組等は、比較的良好その姿をとどめている。また、方丈と開山堂を繋ぐ廊橋とそこに設けられた亭の観月台の外観は、現状と概ね同様に見えるが、観月台の屋根は形状が変化している。

(9) 成就院庭園（東山区、国指定名勝）

成就院は、奈良時代創建と伝える清水寺の本坊。清水寺の伽藍が現在見るかたちを整備されたのは江戸時代初期の1633年頃である。書院北面にある主庭の築造時期は明らかではないものの18世紀初頭頃までに現在のよう形に造られていたことは、他の資料から確かである。庭園は、書院からの鑑賞を想定した座観式で、音羽山から続く東部の斜面を築山と見立て、その裾の平坦地部分には池を配し、庭北方の湯屋谷を隔てた高台寺山を借景とする。高台寺山の山腹に石燈籠を据えて、庭園との一体感を演出する。池には二つの島を置き、中央の大きい島には烏帽子石と石燈籠（蜻蛉燈籠）、西側の小さい島には籬島石を置く。また、池の東岸には枯滝の石組がある。

『都林泉名勝図会』『清水成就院』の鳥瞰図は「其一」「其二」の二枚からなるが、書院の上方に視点を置いて書院北面の主庭を描いたのが「其一」である（図9）。庭園の中心をなす池には、烏帽子石と蜻蛉燈籠を置く画面中央の中島ならびに籬島石を置く左下の西小島が描かれ、中央の中島に

は右手前から板橋が架かる。画面右手（東）の斜面は芝地のところどころに刈込を配しており、書院からは飛石が打たれている。また、書院前には「朝鮮石」と記された舗石が見える。

現状を絵図と比較すると、池の形状や中島の烏帽子石・蜻蛉燈籠や籬島石などは『都林泉名勝図会』の図と同様であるが、烏帽子石は池の北に移されていたものをもとの位置に戻したものである（久恒1967、p.457）。また、絵図に見られる滝の水はなく、枯滝となっている。東の斜面では、図に見られる飛石は現存しないが、刈込は『都林泉名勝図会』の図をモデルに直方体や球形に剪定管理している。現状ではこの庭園の特色となっている借景・高台寺山の石燈籠は、絵図には描かれていない。

(10) 智積院庭園（東山区、国指定名勝）

智積院は、豊臣秀吉の根来寺焼討ちにより京都に逃れた玄侑僧正が、徳川家康の援助により江戸時代初頭（17世紀初頭）に京都東山の山麓に再興した寺院。書院の東に広がる庭園は、1674年の築造と伝えられている。庭園は、書院の東面に接する南北に長くゆったりとした池と対岸の斜面を利用した築山で構成される。サツキの刈込で覆われた築山では、滝石組とその上部の高い位置に架けられた石橋が庭景の中心となる。さらに、池南部の水面近くに低く架かった石橋から築山に登る園路は、実用的ではないものの、来訪者の視線を集める。

『都林泉名勝図会』『智積院』の鳥瞰図は、書院の建物上空に視点を置き、書院の東に接する幅広い流れ状の池とその対岸の築山を描く（図10）。画面右手（南）には池に架かる二連の石橋があり、石橋を渡ったところから始まる飛石は築山を越えて画面左手の池北東岸の橋に至っている。築山の北部は刈込に囲まれるかたちで枯流れから枯滝に至る石組が描かれている。また、築山南部には点々と刈込が見え、頂



図9 清水成就院

部には層塔も見える。

現状を絵図と比較すると、池南部に架かる二連の橋や築山頂部の層塔といった細部も含め、池・築山ともに概ねよく保存されている。一方で、庭景の中心となる滝石組では、絵図にはない溝状の窪みを持つ水落石¹⁰や三角柱状の滝添石¹¹が加えられ、枯滝であったものが水の落ちる滝に変わっている。なお、現在の書院は、1947年の火災焼失後再建されたものであり、書院南東に隣接する茶室もその再建時に建てられたものである。

(11) 龍安寺方丈庭園（右京区、国指定史跡・特別名勝）

龍安寺は、室町時代中期（15世紀）創建の禅宗寺院である。石庭と称される方丈前面（南面）の枯山水庭園が築造された年代は明らかではないが、江戸時代初期（17世紀）

と見るのが妥当と思われる。一面に白砂を敷き詰めた東西25m・南北10mの空間に15の景石を5群に分けて配置する抽象的なデザインは「虎の子渡し」などと称されるが、何を表現したのかは不明で、見る人の様々な想像を掻き立てる。

『都林泉名勝図会』「龍安寺方丈林泉」の鳥瞰図は、方丈の建物上空に視点を置き、南面の枯山水の全景を描く（図11）。画面の奥（南）と右手（西）を築地塀に囲われた白砂敷きの地面には5群に分けて15石が配され、それぞれの石群の周囲には点描で表現されたコケが見える。また、築地塀の背後にはマツが立ち並ぶ。

現状を絵図と比較すると、石の配置には変化がないように見られる。あえて差異をあげれば、方丈から見て最も左手（東）の五石の石組のうち手前左右に置かれた二つの小さな石



図10 智積院

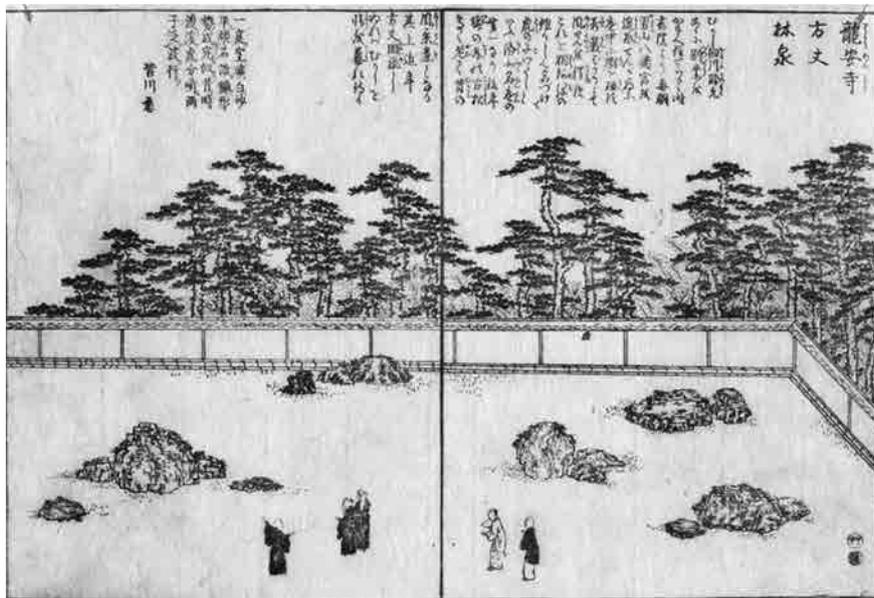


図11 龍安寺

が絵図では地表面からやや高さがあるように描かれているが、現状では石の上面が白砂の面とほぼ同一で平たく見える。これは、白砂の厚みが増したために石が沈んで見えるようになったのかもしれない。また、白砂敷に描かれた砂紋は、絵図には見られない。築地塀は、現状は柱が見えない形状であるが、絵図では柱が等間隔に立つ。また、築地塀の背後の植栽は、絵図に描かれたマツからシダレザクラとカエデに変わっている。

(12) 退蔵院庭園（右京区、国指定名勝・史跡）

退蔵院は、禅宗寺院である妙心寺の塔頭。1404年の創建であるが、現在地に移ったのは室町時代後期の16世紀前半である。方丈の西に位置する庭園は、16世紀中期の画家・狩野元信による作庭との伝承もあるが、安土桃山時代の16世紀末に方丈と一体的に築造されたと考えるのが妥当であろう。庭園は枯山水で、方丈西端の「鞘の間」から見ると、低い築山を背景として、右奥（北西）の隅に枯滝、その左手（南）に大石を置き、滝口には波分石¹²を置く。さらに、手前に広がる白砂敷の枯池には石組で護岸された中島や岩島を配している。色彩豊かな景石を用い、デザイン的にもよくまとまった庭園となっている。

『都林泉名勝図会』「妙心塔頭退蔵院」の鳥瞰図は、方丈上空から西方の庭園を描いている（図12）。右奥（北西）に枯滝、その前には波分石が見える。中島には、画面右手の北岸から橋が架かり、画面奥の西岸にもう一本の橋が架かる。西岸では橋から続く道が大石背後の築山の奥へと入って行き、画面左手（南西）の池尻に架かる橋に至る。白地で表現された枯池には、岩島や丸い刈込が見える。

現状を絵図と比較すると、枯滝の石が描かれた石よりも目立つものの、枯池や石組などは絵図に描かれたのとほぼ同様の姿を保っている。植栽については、当然ながら変化しており、庭園の背後はツバキやモッコクなどの常緑樹が中心で、絵図

に見られるマツはあまり目立たなくなっている。また石組の根締め等として植えられたサツキの刈込は少し大きくなっているが、庭園に大きな影響を与えるほどではない。

(13) 鹿苑寺（金閣寺）庭園（右京区、国指定特別史跡・特別名勝）

金閣寺と通称される鹿苑寺は、室町幕府三代将軍・足利義満が、14世紀末に、鎌倉時代の有力貴族西園寺家の別荘であった北山第を譲り受けて大規模に改修して造営した北山殿を前身とする。義満の没後に仏寺となったが、将軍の別荘を基にしているため、当初から大規模な池庭を伴っていた。ただし、15世紀後半以降の戦国時代に荒廃し、江戸時初期（17世紀初期）に住職・鳳林承章の努力で現状に近い姿に復興された。楼閣建築である金閣が畔に建つ鏡湖池には芦原島をはじめとして岩島も含め多数の島があり、多島海的な庭景となっている。鏡湖池から一段上がった平坦地には鎌倉時代の北山第時代からの池である安民沢があり、鏡湖池への導水路に安民沢から水が流下する部分には龍門瀑が造られている。また、安民沢の東の眺望のよい高台には、江戸時代初期（17世紀）に建てられ、1874年に再建された茶室・夕佳亭がある。

『都林泉名勝図会』「金閣寺」の鳥瞰図は、鏡湖池南部の上空に視点を置き、「其一」に高台の夕佳亭や上段から下段に水の落ちる龍門瀑、さらに鏡湖池の東部を描き、「其二」に金閣と鏡湖池の全景ならびに西方の衣笠山を描く（図13）。本書掲載の鳥瞰図の中でも屈指のパノラマであり、立地も含めた庭園の全容がうまくまとめられている。よく見ると、木々や景石に雪が積もり、画面右端の鏡湖池東部では池に氷が張った様子も窺える。金閣寺の庭園を鑑賞する季節として冬を薦めている描き方も解釈できる（白木2020、pp.87-90）。亀島・丸山八海石といった神仙思想や仏教思想に由来する

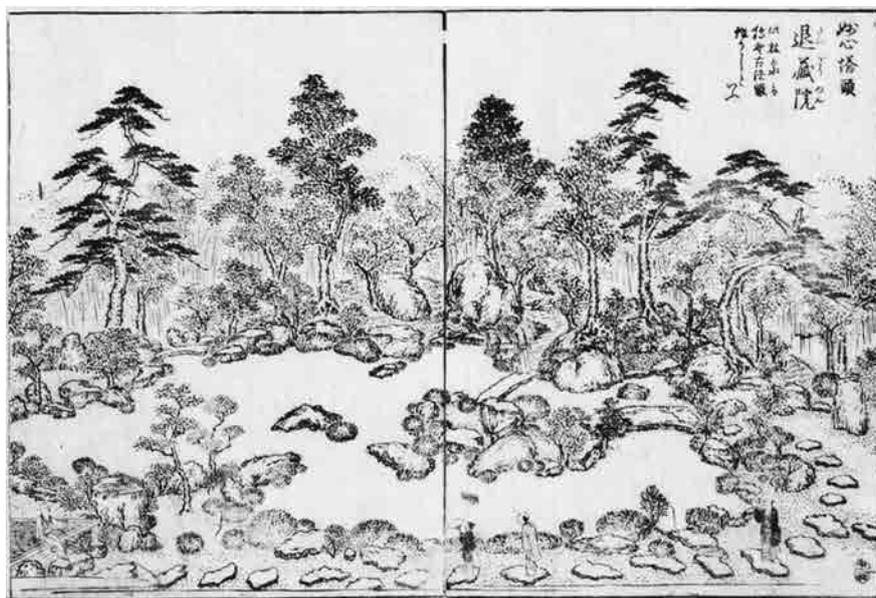


図12 退蔵院

名称を持つ島や石、畠山石・赤松石といった寄進したとされる守護大名の名の注記された石が鏡湖池に配置されている様子もよくわかる。庭園内の植栽は、鏡湖池の島々の上を含め、マツが主体となっている。

現状を絵図と比較すると、絵図上に注記される龍門滝（瀑）や鏡湖池の九山八海石・夜泊石といった「名物」が現地で特定でき、全体の庭景はよく保存されていることがわかる。植栽についても、鏡湖池の島々などは今もマツが中心で、描かれた姿を保つように維持管理されていることが窺える。

(14) 天龍寺庭園（右京区、国指定史跡・特別名勝）

天龍寺は、後醍醐天皇の冥福を祈るため、夢窓疎石を開山として、室町時代初頭の1339年に足利尊氏が創建した禅宗寺院である。大堰川東岸の寺地は鎌倉時代の離宮である亀山殿の敷地を概ね引き継いだものであるが、曹源池を中心とする大方丈背面の庭園は夢窓疎石によって作庭されたもの

と考えられる。その後天龍寺は度重なる火災で何度も焼失しているが、亀山の山裾にある池庭はほぼ原形を保ったと考えられている。庭園の見どころとなるのは、大方丈から見て対岸にあたる池西岸の石組である。龍門瀑の石組とその前の入江に低く架けた石橋、さらにその前方の池中立石が絶妙に組み合わされたデザインは、日本庭園史上屈指のものと評価されている。また、背後の亀山とその向こうに見える嵐山の借景もこの庭園の不可欠な要素である。

『都林泉名勝図会』「天龍寺方丈林泉」の鳥瞰図は、方丈の南方上空に視点を置き、「其一」「其二」あわせて北西方向の池庭全景と亀山・嵐山などの背後の山々を描く（図14）。正面の龍門瀑には水が落ち、すぐ前の石橋を潜って池に水が注いでいる。その前の池水面には池中立石が立ち、池の西岸や手前の東岸の岬などは護岸の石組が組まれる。池周辺の植栽は、手入れの行き届いたマツが多い。

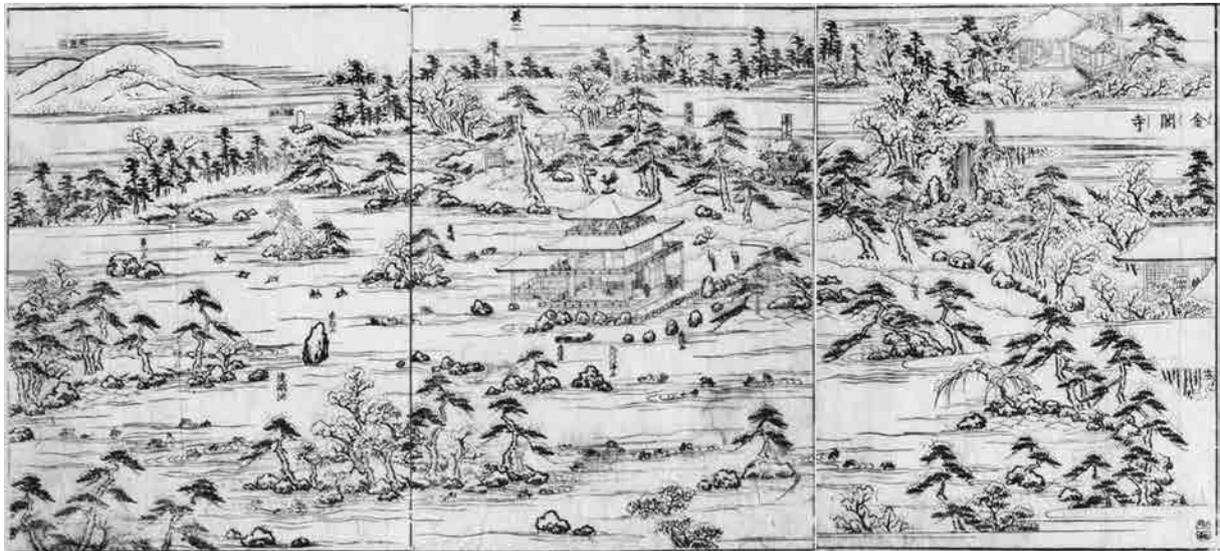


図13 金閣寺



図14 天龍寺

現状を絵図と比較すると、概ね絵図の状況がよく保たれており、この絵図を一つの規範として維持管理されていることが窺える。変化している部分としては、白幡 (2009, pp.108-109) が指摘するように龍門瀑が水の落ちる滝から枯滝となっていることのほか、池中立石の南の池水面に絵図には見られない岩島が4つ見られること、多く描かれているマツがかなり失われカエデが目立つことなどである。

IV. まとめ

本稿では、京都の庭園の二百数十年前に描かれた姿と現状を比べるという歴史的庭園の楽しみ方を提案した。前述のとおり、庭園の修理や修復にあたって『都林泉名勝図会』が参照されることも多かったため、見比べて同様に見えても実は現状がオリジナルを遺している訳ではないこともある。逆に『都林泉名勝図会』の鳥瞰図が正確に当時の姿を描いているとは必ずしも言えないので、絵図に描かれたとおりでなくとも当時の状況を遺していることもありうる。そういうことも考え併せて見比べると、さすがに難しいし、かえって庭園を鑑賞する楽しみを減じかねない。それでは、どうしてこの鑑賞法を提案するのか。もちろん庭園の歴史的変遷を知り楽しむことが眼目であるが、くわえて細部をしっかりと見て楽しむためである。

桜の季節、若葉の季節、紅葉の季節などに京都の歴史的庭園を訪れ、その景色を鑑賞するのは楽しいし、心地よい。しかし、そうした季節感だけを楽しむのであれば、訪れるのは京都の歴史的庭園である必要もない。自然の景勝地や公園などで、季節ごとに素晴らしい景色が楽しめる快適な時間を過ごせるところも数多い。入場料を支払って歴史的庭園を訪れるのであれば、季節を問わず、庭園のレイアウトや細部のデザインあるいは借景などを念入りに見るといふ楽しみ方を筆者は薦めたいと思う。その際に、一つの手がかりになるのが、二百数十年前の庭園を鳥瞰図に描いた、当時としては世界的にも稀有の庭園ガイドブック『都林泉名勝図会』なのである。

第三章で示した庭園は、現在の京都の庭園観光においても重要な位置を占めているものばかりであり、訪れたことがあっても再度訪れてみたいと思う観光者も少なくないと思う。白幡洋三郎著の文庫本 (白幡 1999, 2000) を携えての庭園巡りを薦めたいが、現在は入手も容易ではない。さいわいなことに、国際日本文化研究センターのデータベース (ウェブサイト3)) には『都林泉名勝図会』のデジタル画像が収録されている。したがって、電子タブレットやスマートフォンさえ手元があれば、『都林泉名勝図会』の鳥瞰図と現状を比較しながらの庭園巡りも容易である。京都の歴史的庭園の楽しみ方として、『都林泉名勝図会』の利用を提案したいと思う。

なお、本稿はJSPS 科学研究費基盤C「我が国の庭園観光の適切かつ持続的な推進に向けた研究」(代表者:小野健吉、課題番号:19K12547)の成果の一部である。

【文献】

- 久恒秀治 (1967) 『京都名園記 (上)』、誠文堂新光社
 久恒秀治 (1968) 『京都名園記 (中)』、誠文堂新光社
 久恒秀治 (1969) 『京都名園記 (下)』、誠文堂新光社
 中根金作 (1992) 『京都の庭と風土』、加島書店
 中根金作 (1999) 『中根金作 京都名庭百選』、淡交社
 小野健吉 (2004) 『岩波日本庭園辞典』、岩波書店
 小野健吉 (2017) 「江戸時代後期の観光資源としての京都の庭園:『都林泉名勝図会』の庭園描写から」『観光資源としての庭園 (1)』科学研究費研究会報告書 pp.35-47
 小野健吉 (2018) 「『都名所図会』にみる観光資源としての庭園」『観光資源としての庭園 (2)』科学研究費研究会報告書 pp.77-104
 小野健吉 (2019) 「日本における寺院庭園の歴史と庭園観光」『観光学』20号 pp.13-25
 小野健吉 (2022) 「京都の庭園観光に関するオンライン調査を通じた実態把握とその結果に基づく庭園」『観光学』26号 pp.51-68
 白幡洋三郎 (1999) 『都林泉名勝図会 (上)』、講談社学術文庫
 白幡洋三郎 (2000) 『都林泉名勝図会 (下)』、講談社学術文庫
 白幡洋三郎 (2009) 『彩色みやこ名勝図絵』、京都新聞出版センター
 白木朝乃 (2020) 「『都林泉名勝図会』における庭園描写の特徴」京都造形芸術大学博士論文 file:///C:/Users/000237/Downloads/(2019)51711001_白木朝乃_全文_1%20(2).pdf

【ウェブサイト】

- 1) Historic Monuments of Ancient Kyoto (Kyoto, Uji and Otsu Cities) <https://whc.unesco.org/en/list/688> 2023年9月16日最終閲覧
- 2) 国指定文化財等データベース <https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index> 2023年9月16日最終閲覧
- 3) 国際日本文化研究センター都泉名勝図会データベース <https://www.nichibun.ac.jp/meisyozeu/rinsen/c-pg3.html> 2023年9月16日最終閲覧

【図版】本稿で使用した図版は、すべてウェブサイト3) 国際日本文化研究センター都泉名勝図会データベースの公開画像を使用した。

註

- 1 ウェブサイト1) では、“As the centre of Japanese culture for more than 1,000 years, Kyoto illustrates the development of Japanese wooden architecture, particularly religious architecture, and the art of Japanese gardens, which has influenced landscape gardening the world over.” (「京都は、1000年以上にわたる日本文化の中心地として、日本の木造建築、特に宗教建築の発展を例証し、あわせて世界中の造園意匠に影響を与えた日本の庭園芸術を例証している。」)との説明がなされている。
- 2 例えば、成就院の修復では池の北側の芝地に移されていた烏帽子石を『都林泉名勝図会』の絵図のように中島に移し(久恒1967,p.457)、本願寺大書院の修復では、『都林泉名勝図会』の絵図に描かれたソテツがすべて枯れていたため新たなソテツを中島に移植するとともに、ほとんど失われていた白川砂を補充した(久恒1967, p.142)。
- 3 例えば、大徳寺方丈庭園では、『都林泉名勝図会』の絵図をもとに枯滝の石組周辺の茂り過ぎた樹木を除去し土砂を漉き取って隠れていた石を地表に表した(中根1999, pp.87-89)。また、知恩院方丈庭園では、南池の中島の修理にあたって、『都林泉名勝図会』の絵図を参照しながら池中に倒れていた石を護岸に立てるなどの修理を実施した(中根1999, pp.191-193)。
- 4 鳥瞰図の画法で実景を描いた古い事例としては、1501～1506年

の間の制作とされる雪舟筆『天橋立図』がある。こうした鳥瞰図の画法は、広大な景色を画面に収める中国山水画からもたらされたものと考えられる。

- 5 東山山麓に立地する「銀閣寺林泉」「南禅寺方丈」「高台寺方丈林泉」「清水成就院」等の背景の東山にはマツが描かれており、現在は主に照葉樹林となっている東山の植生が当時はマツ（アカマツ）林であったことがわかる。
- 6 庭園の地表面に敷かれることの多い白川砂は、地質学的には粒径2mm未満の砂ではなく2mm以上の礫である。白川砂敷と記すべき場合も、本稿では原則として慣用的に用いられている「白砂」の語を用いる。
- 7 藤原定家の日記『明月記』建保5年（1217）2月8日条に、水無瀬殿造営の際に、庭園の地表面に白川砂を敷いたことが記される。
- 8 「銀閣寺林泉」の図には「其一」「其二」の表記はないが、便宜上、他の図での表記に準じて初めの見開き2頁を「其一」、残りの1頁を「其二」とする。
- 9 岩島とは、庭園の池の中に配された石からなる島。1石の場合と複数の石が組み合わさった場合がある。
- 10 滝石組の中心に置いて水を落とす石。
- 11 水落石の脇に立て添え、水落石とともに滝石組の中心をなす石。『築山庭造伝（前編）』（1735）によれば、大きな立石を用いるとされる。
- 12 波分石とは、滝の水が落ちる滝壺のやや下流に据えて水を分け流す石。枯山水の枯滝でも同様の位置に置く石を指す。

受理日 2023年12月7日